

どしてん　こしてん　あらすじ

私は大阪から南九州の夫の実家に夫婦で引っ越してきた。実家の敷地内に家を建て、一人暮らしの姑とは、ほどよい距離を保ちながら、気持ちを楽にして暮らしている。

姑も、上手に一人暮らしを楽しんでいるように見える。

敷地内にある築山が、古墳であることを私は知る。大学で古代史を学んだ私は、驚き興味をもつが、姑のシミちゃんも、夫の七生さんも、敷地内に古墳があることを当たり前前に受けとめている。

ある日、シミちゃんが、古墳の上の紫陽花の数が足りないと言い出し、古墳Gメンに捕まってしまうと騒ぐ。紫陽花の数を何度も数えるが、どうしてもこうしても（どしてん　こしてん）数が合わない。

悩むシミちゃんと温泉施設に行ったり話し合ったりするが、シミちゃんは納得しない。

やがて、長年の友人のホンゴーさんが古墳Gメンだと決めつける。シミちゃんの息子である七生さんは、「ぼけたんじゃないの」と言うが、私は信じたくない。しかし、確かに、シミちゃんは、老いの新しい階段を上がったのかもしれない。